

心理学の一つに「ジョハリの窓」という自己分析方法があります。これによると、「私」という存在は、「自分も他人も知っている私」、「自分は知っているが、他人は知らない私」、「自分は知らないが、他人は知っている私」、「自分も他人も知らない私」の4つから構成されているのだと言います。だとすると、自分のことは自分が良く分かっているつもりでいて、実は、半分程度しか分かっていないということになります。

イエスは「羊」を題材にして、たとえ話をされています。羊は、攻撃に対処する力を持ち合わせず、ストレスを抱えやすく、さらには近視で視力も悪いので、周囲がよく見えず、道に迷いやすい動物であると言われていています。それゆえ羊は、羊飼いに導かれなければ命を長く保つことは出来ませんでした。弱さと脆さを抱え持ち、気づかぬ内に周りのことが見えなくなって道に迷ってしまう…そんな羊達の姿に、イエスは私達人間の姿を重ね合わせていたのかもしれませんが。人間もまた、羊と同様、誰かに導かれなければ命（の質）を保てない存在であることをイエスは暗示しておられるように思います。

その上でイエスは、「門から入る…羊飼い」（2節）に導かれよと語ります。当時、羊が出入りする門は、その習性から、非常に狭く作られていました。ですので、羊が出入りする戸口には、尿や糞や縮れた毛がこびりついていて、いつも汚れていました。イエスはその門から入る羊飼い、あるいは、「羊の門」（7節）そのものであると語るのです。すなわちイエスは、私達の汚れた心、罪の部分もまるごと身に受けながら、一人ひとりの「名を呼んで連れ出す」（3節）ほどに私達を慈しみ、赦し、導こうとされる羊飼いであるということが言い表されています。このたとえ話の聞き手であるファリサイ派の人々は、ユダヤ社会の掟を忠実に守っていました。自分達は正しい側において、罪を抱えているなどとは思ってもいないですから、このイエスの話が自分達とどんなにかかわりがあるのかさっぱり理解できないでいます（6節）。

自分のことは自分が良く分かっている、と言われるます。しかし、キリスト教信仰においては、神を絶対とするが故に、他人はもちろん、自分のことでさえ全てを見定めることはできないことになります。それゆえ、自分が羊飼いとなって自分を導くことはできません。自分以外の羊飼いが必要です。その羊飼いは、私たちのことをよく知っておられる人でなければなりません。弟子が裏切り、逃げ去ろうとも、その全てを見通した上で、十字架の死に至るまで、私達を慈しむことに従順であったキリスト・イエス。この羊飼いの招く声に、導かれようとする者でありなさいと聖書は語り続けています。

（文責：望月達朗牧師）

